

特別な支援を必要とする子どもの理解と対応に関する研究

——保育所に在籍する子どもの行動に着目して——

小柳津 和博

A Study on Understanding and Supporting Children with Special Needs

—Focusing on The Behavior of Children in Nursery School—

Kazuhiro OYAIZU

1. 問題および目的

近年、保育を取り巻く環境には、特別支援、児童虐待など課題が山積している。その中でも特別な支援を必要とする子どもたちは増加の一途をたどっており、その子らに対する保育・教育の質を高めることは社会全体の喫緊の課題であるといえる。保育所保育指針（2017）⁽¹⁾では、「障害のある子どもの保育については、（中略）指導計画の中に位置付けること。（中略）子どもの状況に応じた保育を実施する観点から、（中略）適切な対応を図ること」と示されている。しかし、保育所においては障害のある子どもだけが特別な支援を必要としているわけではない。障害の診断の有無にかかわらず、いわゆる「気になる子ども」にも適切に対応している現状がある。馬場（2016）⁽²⁾によると、本国において「気になる子ども」に類する表現を使った研究・報告は1980年代から見られるようになってきている。しかし、守ら（2013）⁽³⁾も指摘するように、「気になる子ども」については多様な所見があり、定義が決まっているわけではない。ただ、阿部（2018）⁽⁴⁾や西村（2011）⁽⁵⁾が言うように、「気になる子ども」は「特別な支援・配慮を必要としている子ども」であるという認識は共通しているものと考えられる。

守ら（2013）は、保育所では社会の価値観の多様化や規範意識の低下、児童虐待の増加など様々な社会情勢の変化をダイレクトに反映するため、多方面な課題への支援が必要不可欠となると述べている。多方面の課題に日々直面している保育所等の施設において、「特別な支援を必要とする子ども」の理解はどのように進んでいるのであろうか。久保山ら（2009）⁽⁶⁾は、保育者へのアンケート調査を行い、子どもたちの行動について、①発達上の問題、②コミュニケーション、③落ち着きがない、④乱暴、⑤情緒面の問題、⑥しようとなし（無気力など）、⑦集団への参加、⑧その他の8項目に分類している。玉井ら（2011）⁽⁷⁾、今中ら（2013）⁽⁸⁾は、「子どもの強さと困難さアンケート（SDQ）」の指標を用いて、①行為面、②多動・不注意、③情緒面、④仲間関係、⑤向社会的性の5項目から子どもの気になる行動特性について検討している。嶋野（2014）⁽⁹⁾は、①反社会的行動尺度、②非社会的行動尺度、③自閉的行動尺度、④多動的

行動尺度から子どもの行動を捉え「気になる子どものチェックリスト」の作成を試みてきた。これらの先行研究は、特別な支援を必要とする子どもたちの行動の特性について整理するものであり、保育者にとって子どもの理解を支える基盤として大変示唆に富んでいる。しかし、今中ら（2013）も指摘しているように、子どもの理解を深める視点をもとにして、具体的な支援や対応策についての検討や議論が十分になされているとは言い難い。また、既存の研究においては、対象として保育所と幼稚園をまとめて調査しているものが多く、保育所のみ、または幼稚園のみを調査の対象とした研究・報告は少ない。保育所および幼稚園は双方独自の機能があるゆえに、「気になる子ども」への捉えの現状に違いがある（守：2013）ことを鑑みると、保育所と幼稚園を同一にして検証するより、分けて整理を進めることが求められているのではないだろうか。

そこで本研究は、保育所だけに焦点を当て、保育所に勤務する現任保育者を対象とした調査を行うこととした。その中で、特別な支援を必要とする子どもの理解として、保育所に在籍する子どもの「気になる行動」および、実行している具体的な対応・支援の方策について、保育士の所属や年齢によって差異があるのかについて検証することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査の対象および手続き

2017年X月Y日、A県内の現任保育士等が参加する研修会（筆者が講師を担当）において、参加者146名を対象にして質問紙による調査を依頼した。対象者には研修会の休憩時間等を利用して質問紙の記入を依頼した。回収については、研修会終了後の当日に行った。

(2) 倫理的な配慮

事前および当日において倫理的な配慮を行った。事前の配慮としては、本研究の趣旨および質問紙原案について、当該研修会を主催する理事会に報告し、審査を受けることで調査の許可を得た。当日の配慮としては、対象者に本研究の趣旨について口頭および文書にて説明した。また、調査の結果について、個人が特定される形で公表することはないこと、いつでも研究協力を撤回できることについて口頭および文書で説明した。その上で、本研究の趣旨に賛同する方に質問紙の提出を依頼した。

(3) 調査内容

基本情報として、所属先（保育所、幼稚園、こども園、公立・私立など）、年齢、経験年数（休職期間等がある場合は通算）を尋ねた。

子どもの行動を理解する視点として、菅原（2015）⁽¹⁰⁾の調査を基に、「気になる行動」を示す子どもが在籍しているかについて以下の14項目から尋ねた。

具体的には、①落ち着きがない、②じっとしてられない、③部屋を飛び出す、④ことばが

出ない、⑤パニックになる、⑥話を聞くことができない、⑦指示を理解することができない、⑧集団生活に参加できない、⑨遊びをやめられない、⑩偏食がある、⑪自傷行為がある、⑫他害行為がある、⑬ぼうっとしている、⑭視線が合わない、の14項目である。

子どもの行動に対応する具体的な支援の視点として、保育士が実際に行っている対応について自由記述で尋ねた。

3. 結果

(1) 回収状況

質問紙を配布した研修会参加者146名のうち、114名から回答があった（回収率78.1%）。そのうち、現在、公立および私立保育所に在籍している96名の現任保育士の回答を抽出した。さらに未記入等の不備のあるものを除き、90名の有効回答を分析の対象とした。

(2) 対象者の属性

基本情報として、対象者の所属、年齢ごとの人数および割合、経験年数（平均値・標準偏差）をまとめ、表1に示した。

表1 対象者の属性

年齢 所属	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50歳以上	合計 (N)	割合 (%)	経験年数(M) (SD)
公立 (n)	4	6	4	2	16	17.8	13.3 9.3
私立 (n)	28	25	11	10	74	82.2	10.8 7.6
合計 (N)	32	31	15	12	90	—	11.3 7.9
割合 (%)	35.6	34.4	16.7	13.3	—	100	—
経験年数(M) (SD)	4.7 2.0	11.3 3.4	15.3 6.9	23.5 9.6	11.3 7.9	—	—

本研究の対象となった保育士は公立保育所所属が17.8%、私立保育所所属が82.2%であり、多くが私立保育所に所属していた。

年齢群の割合は、公立保育所においては30歳代が最も多かった。私立保育所は20歳代が最も多く、次いで30歳代が多かった。公立・私立を合わせた全体としては、多い方から20歳代、30歳代、40歳代、50歳以上となっており、年齢が低い群が多い結果であった。

対象となった保育士の所属別経験年数平均値は、公立保育所所属群が13.3年、私立保育所所属群が10.8年であり、公立保育所所属群が私立保育所所属群よりも経験が長かった。年齢別にみると、年齢群が高くなるごとに、経験年数の平均値も長くなる傾向であった。

(3) 保育士が気になる子どもの行動

子どもに見られる14項目の行動の中で、保育士として気になる項目について、所属群別の結果を表2に、年齢群別の結果を表3に示す。

所属群別の結果(表2参照)において、2/3以上の高い割合で保育士が気になると指摘した項目を見ると、公立群では、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「指示が理解できない」の3項目であった。私立群では、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「話を聞くことができない」、「集団生活に参加できない」の4項目であった。

1/3以下の低い割合で保育士が指摘するのは、公立群で「偏食がある」、「自傷行為がある」、「ぼうっとしている」の3項目。私立群では、「自傷行為がある」、「ぼうっとしている」の2項目であった。

保育士一人当たりが指摘する項目数の平均は、公立群が7.19、私立群が7.31と同数に近い結果となった。両者の平均値をt検定(両側検定)で求めたところ、有意な差は認められなかった。

年齢群別の結果(表3参照)において、2/3以上の高い割合で保育士が気になると指摘したものは、20歳代では、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「集団生活に参加できない」の3項目であった。30歳代では、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」の2項目。40歳代では「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「指示が理解できない」、「視線が合わない」の4項目。50歳以上では、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「ことばが出ない」、「話を聞くことができない」、「指示が理解できない」、「集団生活に参加できない」の6項目であった。

1/3以下の低い割合で保育士が指摘する項目は、20歳代では「自傷行為がある」、「ぼうっとしている」の3項目。30歳代では、「遊びをやめられない」、「偏食がある」、「自傷行為がある」、「ぼうっとしている」の4項目。40歳代では「自傷行為がある」、「他害行為がある」、「ぼうっとしている」の3項目。50歳以上では、「自傷行為がある」、「ぼうっとしている」の2項目であった。

保育士一人当たりが指摘する項目数の平均値は、20歳代が7.15、30歳代で6.90、40歳代は7.60、50歳以上では8.25と年齢群が上がるほど気になる行動は増える結果となった。年齢群別の一人当たりの指摘項目数の平均値について、対応する全ての組み合わせでt検定(両側検定)を行ったものの、有意差を認められる組み合わせはなかった。

表2 保育者が気になる行動（所属群別）

所属 行動	公立 (n) 割合 (%)	私立 (n) 割合 (%)	全体 (N) 割合 (%)
落ち着きがない	13 81.3	68 91.9	81 90.0
じっとしていられない	12 75.0	58 78.4	70 77.8
部屋を飛び出す	9 56.3	31 41.9	40 44.4
ことばが出ない	9 56.3	42 56.8	51 56.7
パニックになる	7 43.8	33 44.6	40 44.4
話を聞くことができない	9 56.3	50 67.6	59 65.6
指示が理解できない	13 81.3	47 63.5	60 66.7
集団生活に参加できない	10 62.5	50 67.6	60 66.7
遊びをやめられない	7 43.8	32 43.2	39 43.3
偏食がある	4 25.0	31 41.9	35 38.9
自傷行為がある	3 18.8	10 13.5	13 14.4
他害行為がある	8 50.0	30 40.5	38 42.2
ぼうっとしている	3 18.8	23 31.1	26 28.9
視線が合わない	8 50.0	36 48.6	44 48.9
合計 (N)	115	541	656
一人当たり指摘数 (M)	7.19	7.31	7.29

表3 保育者が気になる行動（年齢群別）

年齢 行動	20-29 (n) 割合 (%)	30-39 (n) 割合 (%)	40-49 (n) 割合 (%)	50- (n) 割合 (%)	全体 (N) 割合 (%)
落ち着きがない	29 90.6	25 80.6	15 100.0	12 100.0	81 90.0
じっとしてられない	25 78.1	24 77.4	12 80.0	9 75.0	70 77.8
部屋を飛び出す	16 50.0	11 35.5	7 46.7	6 50.0	40 44.4
ことばが出ない	17 53.1	18 58.1	8 53.3	8 66.7	51 56.7
パニックになる	14 43.8	13 41.9	7 46.7	6 50.0	40 44.4
話を聞くことができない	21 65.6	20 64.5	9 60.0	9 75.0	59 65.6
指示が理解できない	20 62.5	20 64.5	11 73.3	9 75.0	60 66.7
集団生活に参加できない	23 71.9	19 61.3	9 60.0	9 75.0	60 66.7
遊びをやめられない	13 40.6	10 32.3	9 60.0	7 58.3	39 43.3
偏食がある	11 34.4	10 32.3	8 53.3	6 50.0	35 38.9
自傷行為がある	5 15.6	5 16.1	1 6.7	2 16.7	13 14.4
他害行為がある	13 40.6	13 41.9	5 33.3	7 58.3	38 42.2
ぼうっとしている	10 31.3	9 29.0	3 20.0	4 33.3	26 28.9
視線が合わない	12 37.5	17 54.8	10 66.7	5 41.7	44 48.9
合計 (N)	229	214	114	99	656
一人当たり指摘数 (M)	7.15	6.90	7.60	8.25	7.29

(4) 保育士が実行している具体的な対応

子どもの行動に対して行っている保育士の具体的な対応について、自由記述による回答を整理する上で、櫻井（2015）⁽¹¹⁾がまとめた特別な支援を必要とする子どもに対する保育者の援助方法の分類を用いて6カテゴリーに分けた。各カテゴリーに分類した具体的な対応の記述について一部抜粋し、表4に示す。

表4 カテゴリー別の具体的な対応

カテゴリー	具体的な回答（一部抜粋）
本人の理解力に合わせる支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分かりやすく伝える（視覚的・具体的・繰り返し） ・ 落ち着いてから対応する ・ 一対一で対応する（大人と一緒に行う） ・ 取り組みやすい環境を作る
人への意識をもたせる支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視線を合わせる ・ スキンシップをとる ・ 関わる回数を多くとる
本人の気持ちに寄り添う支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気持ちに寄り添う（共感する） ・ 代弁をする ・ 不適切な行動が起こる前に止める
他者との関わりを広げる支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団で関わる機会を設定する ・ 適切な関わり方を教える ・ 本人の好きな遊びから関わりを広げる
連携による支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園内で連携をとる（役割分担） ・ 保護者と連携をとる
他児への支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他児に本人の良さを伝える ・ 友達同士で教え合う

各カテゴリーにおける自由記述の回答数をまとめ、年齢群別に整理したものを表5に示す。

全ての年齢群において、最も多く回答があったカテゴリーは、「本人の理解に合わせる支援」であり、調査対象者一人当たり2.30の回答があった。その他で一人当たりの平均が1.00を超えるカテゴリーはなく、最も低いものは「他児への支援」で0.02であった。

年齢群別に一人当たりの回答数の平均値を見ると20歳代が最も多く4.41となった。その他は、30歳代が3.58と最も低く、40歳代では3.87、50歳以上は3.75という結果であった。年齢群別の一人当たりの回答数の平均値について、対応する全ての組み合わせでt検定（両側検定）を行ったものの、有意差のある組み合わせは認められなかった。

表5 気になる行動に対する保育者の具体的な対応（年齢群別）

カテゴリー \ 年齢	20-29 (n)	30-39 (n)	40-49 (n)	50- (n)	合計 (N)	一人当たり 回答数 (M)
本人の理解に合わせる支援	91	55	33	28	207	2.30
人への意識をもたせる支援	10	10	9	4	33	0.37
本人の気持ちに寄り添う支援	23	29	10	6	68	0.76
他者との関わりを広げる支援	15	14	4	5	38	0.42
連携による支援	2	2	2	1	7	0.08
他児への支援	0	1	0	1	2	0.02
合計 (N)	141	111	58	45	355	—
一人当たり回答数 (M)	4.41	3.58	3.87	3.75	3.93	—

4. 考察

(1) 子どもを理解する視点における考察

表2より、公立群と私立群で2/3以上の高い割合で保育士が気になる行動と指摘した項目には差異があった。しかし、公立群で2/3を超える高い割合だった「指示が理解できない」は、私立群では63.5%。私立群で2/3を超えていた「話を聞くことができない」、「集団生活に参加できない」は、公立群においてそれぞれ56.3%、62.5%であった。高い割合として2/3 (66.7%) という設定値で区切った場合は違いがみられるものの、どの行動も公立群・私立群両方で50%を超えていることが分かる。このことから、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「指示が理解できない」、「話を聞くことができない」、「集団生活に参加できない」の5つの視点が、半数以上の多くの保育士にとって子どもの行動を理解する上で気になる点であると考えられる。

これら5つの行動を保育場面に置き換えて考えてみたい。一人の保育士でクラスなどの集団に対してアプローチをする際に、これら5つの行動を起こす子どもが集団内にいた場合に保育士側が一人で対応することができず、困ってしまうことが予想される。本研究で気になる行動として割合の低かった「ぼうっとしている」などについては、保育士として集団への対応を行った後で、当該の子どもに個別に対応することで保育活動が成立する可能性がある行動とも捉えられる。集団への対応を進めつつ、当該の気になる子どもの行動に対して同時に個別対応を行う必要が生まれ、集団の行動に影響を及ぼしかねない行動が保育士として気になると感じるのではないだろうか。玉井ら(2011)の報告では、保育士は「対人関係に沿わない行動」や「集団行動から逸脱する行動」がみられる子どもを「気になる」と判断しやすいと述べている。守ら(2013)は、保育士にとって「子どもの気になる」姿は、自分がイメージしている保育活動に支障をきたす行為であり、「保育のしづらさ」を引き起こすものであると述べている。さらには、保育士が抱く理想の子ども像として、「保育士の言うことを素直に聞くべき」、「雰囲気を読んで集団に従うべき」という概念が生じていることも、子どもの行動に対して「気になる」といった理解に影響しているとも指摘している。本研究において高い割合だった「指示が理解できない」、「話を聞くことができない」は玉井ら(2011)の言う「対人関係に沿わない行動」であると言えよう。また、「落ち着きがない」、「じっとしてられない」、「集団生活に参加できない」などは「集団行動から逸脱した行動」と捉えることができることから、高い割合で気になる行動と判断されたと考えられる。本研究においても、玉井ら(2011)や守ら(2013)の報告を裏付ける結果が示唆された。これらのことから、集団運営を一人で行う保育士にとって、気になる子どもの行動は、「その行動に対応することによって円滑な保育活動を進める上での支障となる可能性がある行動」と理解することができるのではないだろうか。

表3から、各年齢群で保育士が気になると指摘した項目数に着目してみたい。まず、半数以上が気になると指摘した項目数は、20歳代および30歳代で7項目、40歳で8項目、50歳代以上であると11項目になる。また、気になると指摘した保育者が1/3未満の項目を見てみると、

20歳代は3項目、30歳代で4項目、40歳で3項目、50歳代以上になるとわずか1項目まで絞られる。これは、年齢が上がることにより、気になる視点が広がり、細かなところまで子どもを見て理解しようという保育士としての成長がみられると考えられる。

次に、保育士一人当たりの指摘数の平均値について、各年齢群の差異に着目したい。20歳代で7.15であるが、40歳代では7.60、50歳代になると8.25と、年齢群が高くなることで一人当たりの指摘数平均値が増加している。実施したt検定（両側検定）の結果、どの年齢群との組み合わせにおいても有意差はみられなかったものの、30歳代で一旦微減をし、その後は年齢群が高くなるごとに増加していることが分かる。気になる子どもの行動を理解する視点として、年齢が高くなることで複数の視点を同時に確認できるようになっているものと考えられる。ただし、保育士としての視点の拡大・深化は年齢だけが関係しているとは言い難い。表1を見ても分かるように、年齢が高くなるごとに経験年数の平均値も高まっていることから、子どもの行動を理解する視点の拡大・深化は経験年数が大きく関与しているものと考えられる。子どもに適切な支援を提供するためにも、経験のある保育士を中心にして、子どもの行動をより広く深く理解し、保育活動を展開することが求められるだろう。

(2) 具体的な支援の視点における考察

表5から、各年齢群において一人当たりの回答数の平均値を見ると、20歳代が最も多く4.41であり、その他は30歳代で最も低く3.58、40歳代は3.87、50歳以上では3.75となっていた。

菅原（2016）の調査では、30歳代および40歳代において、気になる子どもへの対応については「難しい」、または「対応方法が分からない」と答える保育士が多くなる傾向にあると指摘している。背景として、30、40歳代は各施設において中堅職員となることから、20歳代よりも責任感等が増すことによって、子どもへの対応についても困難を感じやすくなると菅原（2016）は考察している。本研究では、自由記述した具体的な対応策の量を用いて各年齢群の差異を検証しているが、20歳代に比べ、30歳代、40歳代、50歳以上の一人当たりの回答数の平均値が少ない結果となっている。考察(1)においても述べたように、経験年数が長くなることで、気になる行動に対して広い気づきが生まれるようになる。それと同時に、子どもへの支援場面において、対応の難しさについても気づきが拡大・深化するのではないだろうか。経験を重ねることで、一人一人に合わせた支援が必要であることに改めて感じ、実際に行っている自分自身の対応について不安を感じるようになることが、記述数の少なさに影響したとも推察できる。

別の背景として、経験年数が長くなることで支援が自動化・無意識化していることが関与している可能性について述べたい。子どもの行動を理解する視点が広がっている経験豊かな保育士は、子どもの気になる行動に注意が向くようになっているため、不適切な行動が起きないよう未然に防止するための支援を無意識に行っているとも考えられる。しかし、それらの支援を無意識に行い続けることは、適切な対応策であっても暗黙知となってしまうことが危惧される。長年の経験からベテラン保育士が普段実行している支援は、ベテランならではの視点として当

然のことと感じてしまい、あえて記述するまでもないと判断されていると考えることはできないだろうか。とすると、自動化・無意識化している適切な支援は他の保育士に広がっていきにくい。長年の経験の中から、適切な支援を一人一人に合わせて提供できる経験豊富な保育士は、自分が意識している支援だけでなく、無意識で行っている支援を今一度振り返り、言語化していく作業を期待したい。具体的な支援を改めて言語化することにより、多くの保育士が同一見解で保育活動を理解することにつながり、広く子どもを支援することになるものと考え。特別な支援を必要とする子どもに適切な保育を展開するためにも、自分の保育を言語化する作業を積み重ね、具体的な対応をより「見える化」していくことが望まれる。

50歳以上の具体的な対応の量は20歳代に比べて少ないものの、全てのカテゴリーにおいて記述があったことに注目したい。これは、子どもの気になる行動に対して、保育士である自分自身が直接的に子どもに支援することだけが、適切な支援ではないことに気づいているといった結果の表れであると推察する。特別な支援を必要とする子どもたちにとって必要な支援として幅広い視点から、自分以外の支援を有効に活用しようとしているのではないだろうか。阿部(2018)は、特別な支援を必要とする幼児の支援として重要な視点に、①実態把握から得られた具体的な支援の方法を決定すること、②集団の中で指導や支援を生かしていくこと、③遊びを通すことが最も効果的であること、の3点を挙げている。経験豊かな50歳以上の保育士は、一人で①～③まで全ての支援を行うことが難しいことを理解しており、多くの協力者を得ながら①～③を適切に役割分担しながら保育の計画に組み込み、支援を展開していると考えられる。

以上のことから、気になる子どもへの支援として重要なことは、支援や対応策の量ではない。少ない対応策であっても、周囲と協力しつつ、一人一人に合わせて適切な支援が工夫されているかが重要なのである。ベテラン保育士が実践する具体的な支援を言語化するとともに、若手保育士がもつ支援のバリエーションを融合させていくことが、特別な支援を必要とする子どもの理解を深め、よりよい対応を工夫することにつながるのである。

5. 今後の課題

本研究は、意図的に対象を焦点化したとはいえ、特定の施設（保育所）・地域で行ったごく限られた集団による調査といえる。今後は、幼稚園など他の施設においても同様に検証していくことが求められる。その中で、特別な支援を必要とする子どもの理解や対応について、各施設における特性を比較・検討し、よりよい保育・教育環境の在り方を探っていきたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただいた保育士の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- (1) 厚生労働省（2017）保育所保育指針，フレーベル館
- (2) 馬場広充（2016）再考「気になる子」保育者の気づきを深めニーズに応じた支援のために，ジアース教育新社，9-16
- (3) 守巧・山崎摂史・駒井美智子（2013）保育現場における「気になる」姿への傾向分析，東京福祉大学・大学院紀要，4(1)，63-71
- (4) 阿部敬信・佐藤真央（2018）幼児教育における特別な支援が必要な子どもの理解と指導—RTIの考え方を生かした早期からの社会性の発達支援—，別府大学短期大学部紀要，37，29-39
- (5) 西村智子・小泉令三（2011）就学前の「気になる」子の行動特徴と発達障害の関係，福岡教育大学紀要，60(4)，179-189
- (6) 久保山茂樹・斎藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳（2009）「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する研究—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—，国立特別支援教育総合研究所研究紀要，36，55-76
- (7) 玉井ふみ・堀江真由美・寺脇希・松村文美（2011）就学前における「気になる子ども」の行動特性に関する検討，人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌，11(1)，103-112
- (8) 今中博章・高橋実・伊澤幸洋・中村満紀男（2013）保育者の「気になる子」という認識と子どもの行動に関する調査，福山市立大学教育学部研究紀要，1，7-14
- (9) 嶋野重行（2014）「気になる」子どもに関する研究(7)—幼稚園の調査と「気になる子どもチェックリスト」の作成—，盛岡大学短期大学部紀要，24，33-44
- (10) 菅原亜紀（2016）A市内保育所における「気になる子」に関するアンケート調査結果より見えてくるもの，純真紀要，56，85-96
- (11) 櫻井貴大（2015）統合保育における自閉症児へのコミュニケーション支援の実態—保育者の援助や躰きに注目して—，愛知教育大学幼児教育研究，18，27-34

（受理日 2018年8月17日）